

# 農家の兼業はいかにして続いてきたか

## 農業と臨時雇いを兼業する人々の労働観

The Meaning of Work in Rural Areas:  
Modern View of Work in Part-Time Employment

渡部 鮎美

WATANABE Ayumi

- ①はじめに—農家の兼業はイレギュラーか
- ②先行研究における臨時雇いのあつかい
- ③調査方法
- ④調査地概観
- ⑤1960年から現在までの臨時雇いと生業の変化—A家を中心に—
- ⑥丹生における臨時雇いの変化
- ⑦臨時雇いの意味の変化
- ⑧逸脱としての生業活動

### 【論文要旨】

臨時雇いとは出稼ぎや日雇いのように、日々または1年以内の期間を定めておこなわれる労働である。本論では農業と臨時雇いなどの他の仕事を兼業する人々の生計活動の分析を通して、兼業というワークスタイルについて論じる。

調査地の千葉県南房総市富浦町丹生は房総半島南端に位置する集落である。丹生の人々は1960年から現在まで、農業とともに日雇いや農業パートなどの多くの臨時雇いをしてきた。とくに1970年代前半までは臨時雇いが農閑期の収入源となっていた。しかし、1970年代後半になるとトウモロコシ栽培が盛んになり、農業収入が増加して臨時雇いの経済的な意味は希薄化する。それでも現在まで丹生や周辺地域で臨時雇いが続けられてきたのは、臨時雇いが賃金を得る以外の意味をもっていたからである。

まず、彼らにとって臨時雇いはヒマな時間を埋めるための仕事であった。そして、臨時雇いは外出がしづらい環境のなかで、家庭の外へ出る手段にもなっていた。また、彼らにとって臨時雇いは一生や一年、一日のなかでおこなわれる多様な生業活動のひとつであった。

これまでの労働研究では、生計活動と直接結びつかない労働も生計活動と直接結びつく労働と同等の価値をもっていたことが示されている。また、そうした労働観が諸生業の産業化によって崩れていることも指摘されている。しかし、産業化後も生計活動と直接結びつかない臨時雇いのような生業活動は主たる生計手段となる生業活動からの逸脱となっている。一般にイレギュラーな労働とみられる臨時雇いも人々の生活の上ではなくてはならないものだったのである。

本論では、複合生業論などの先行研究で見出された個々の生業活動が、実際にどのようにおこなわれているのかを参与観察や生計活動の通時的な分析を通して示した。そして、一生や一年、一日のなかで、主たる生業活動を逸脱しては復帰する営みが、現代の農業と他の仕事を兼業する人々の労働の総体としてとらえられるものであったことをあきらかにした。

【キーワード】 臨時雇い、労働観、生業、逸脱、兼業

## ①……………はじめに—農家の兼業はイレギュラーか

近年、パートやアルバイトといった臨時雇いと他の仕事を兼業する働き方が社会問題として取り沙汰されている。たとえば、フリーターや出稼ぎ、日雇いをする兼業農家の働き方は農村の経済的疲弊から生じているといわれている。さらに、臨時雇いは短期雇用であるために賃金が安く、雇用も不安定で労働者が著しく不利益を被っているとされる。つまり、臨時雇いはあるべき健全な労働の姿ではなく、社会問題とされるような特異な労働形態とされてきたのである。しかし、臨時雇いは今日、問題となっているアルバイトや出稼ぎだけに代表される労働形態ではない。

平成17年度国勢調査では臨時雇いを「日々または1年以内の期間を定めておこなわれる労働」と定義している。この定義には田植えの早乙女や茶摘みといった古くからおこなわれてきた農業の季節労務なども含まれる。しかしながら一般には臨時雇いはアルバイトや出稼ぎなどの非正規労働を指すものとされ、イレギュラーな労働形態とみられている。

本論で臨時雇いをとりあげる理由は、これまで見過ごされてきた農業と兼業される臨時雇いの評価にある。これまで季節労務や出稼ぎといった臨時雇いは農家の副業として生計活動の上では補助的、副次的なものとして積極的に評価がされてこなかった。しかし、歴史的にみても臨時雇いは決してマイナーな雇用形態ではない。明治期や昭和初期には養蚕や田植えの季節労務が盛んにおこなわれていた。さらに昭和前期までは農業のかたわら、農閑期に臨時工として工場労働に携わる「半農半工」の生活をする人々も多かった〔隅谷 1950〕。また、現在でも農家の大多数は農業と臨時雇いなどの仕事をする兼業農家である。農業統計などでも兼業農家の兼業職種として「臨時雇い」がもうけられており、現在まで臨時雇いという雇用形態が恒常的に存在していたことが分かる〔農林水産省統計情報部 2001 等〕。農家女性も短期間のアルバイトやパートといった臨時雇いに従事することが多かった〔同上〕。

歴史的にみても、現状においても、農業と臨時雇いと兼業は決して特異な労働形態ではない。農村部から都市への出稼ぎなどを考えれば、農業と臨時雇いと兼業が日本全体でも恒常的な労働形態として存在してきたともいえる。しかしながら、農業と臨時雇いと兼業は特殊な労働形態としてとらえられ、その異質性ばかりが取り沙汰されてきた。本論では現代における農業と臨時雇いと兼業という働き方の意味とその変化をあきらかにする。そして農業と臨時雇いと兼業する働き方をしてきた人々の労働観について論じる。

## ②……………先行研究における臨時雇いのあつかい

農業と兼業される臨時雇いは、これまで農業とは別個に論じられることが多く、農業との関係性があまり問われてこなかった。しかし、近年になって出稼ぎ研究を中心に現代における臨時雇いと農業労働の関係性が論じられているようになってきた〔矢野 2004, 松田 2007 等〕。だが、農業との兼業の研究が出稼ぎに集中することで、日雇いやパート労働などの出稼ぎ未満の労働は研究対象からはずれてしまった。これに対して松田陸彦は瀬戸内地域を事例に、日雇いなどの出稼ぎ未満の臨時雇いが生計活動の上で大きな役割を果たしてきたことを指摘している〔松田 2007〕。しかし、未だに多くの研究では依然として出稼ぎ以外の臨時雇いは論の外に置かれている。こうして出稼ぎ以

外の臨時雇いが研究対象からはずされていったのは、一部の地域を除いては臨時雇いの生計活動としての意味が次第に希薄化していったと評価されたためである。

安室知が取りあげた1960年代までおこなわれた農業の季節労務などの臨時雇いは高賃金・好待遇の仕事であった。早乙女などに代表される季節労務は生計活動として十分に機能していたのである〔安室 1998 237-245〕。しかし、時代が下るにしたがい、出稼ぎと同様に臨時雇いのような短期の雇用労働は不安定で条件のよくない仕事とみなされるようになった〔渡辺・羽田1987, 中村1997, 龍井 2003等〕。だが、条件がよくないとされる臨時雇いと農業との兼業が労働形態として現在まで保持されていることは看過できない問題である。

このように先行研究では農業と兼業される臨時雇いの研究が出稼ぎに集中し、出稼ぎ以外の臨時雇いについては十分な議論がされてこなかった。また、出稼ぎ以外の臨時雇いは経済性が希薄化していったことから、現在にいたるまでの通時的な研究の対象にされてこなかった。以上の問題に対し、本論では1960年代から現在までおこなわれてきた農業とその兼業を分析し、農業と臨時雇いを兼業する働き方の変遷とその背景にある現代の労働観を論じる。具体的には、農家1戸を中心に一生、一年、一日の3つのレベルで地域の人々の働き方を分析していく。

### ③……………調査方法

本論では、1960年から現在までの生業活動の変遷と、そのなかでおこなわれた臨時雇いの変化を一生、一年、一日の3つのレベルで探る。調査地は、現在まで農業と臨時雇いがおこなわれている千葉県南房総市富浦町丹生地区とし、詳細な分析をするために農家1戸を取りあげて生業活動の通時の変化を調査した。この際、農業の変化については聞き取り調査に加えて国土地理院撮影の空中写真を用いて土地利用の分析をした。この土地利用の分析ではカラーフィルムで撮影がされた1974年を中心に前後8年ごとの空中写真、計4枚を用いた。そのほか、土地利用の分析ではGPSを活用した実地調査もおこなった。

農業以外の生業活動については聞き取り調査を中心にして、諸資料から裏付けをした。インフォーマントはA家の家族とA家の農業パート、および丹生の住民である。また、現在もおこなっている農業パートについては、筆者自身がA家のパートとして働き、労働時間や就労形態について参与観察をした。調査期間は2006年2月から2007年6月までの110日間である。

### ④……………調査地概観

#### 4.1 丹生と周辺地域のむすびつき

調査地の千葉県安房郡南房総市富浦町は房総半島南部に位置する〔図1〕。富浦町の北部には鉄鋼業などの工場が集まる君津市がある。隣接する市町村には安房郡で最も人口の多い館山市、酪農の盛んだった三芳村（現南房総市三芳）などがある。本論で調査の中心としたのは、富浦町の海岸部に近い山間地にある丹生〔図2①〕である。

丹生は年間を通して気温が高く、冬期にも作物の栽培ができる。なかでも、山地で栽培され、6月に収穫されるピワと11月から4月にかけて「菜の花」として売られる葉野菜のナバナは丹生の



図1 丹生周辺の市町村  
(2006年の市町村合併以前)

パートを募っている。

丹生に近い館山市船形〔同④〕は漁業で栄えた集落であるが、ここにも農家出身の女性が多く、丹生ではビワのパートを頼むことがあった。また、丹生の東に接する富浦町大宮〔同⑤〕には製材所があり、富浦町の山林事業の多くを担ってきた。1970年前半までは丹生でも大宮の製材所で臨時雇いに就く男性が多かった。

集落景観をみると、丹生や周辺地域では住宅が主要道沿いや一部の場所に密集している。多田良・船形は住宅が密集している。丹生・深名・大宮は住宅がそれほど密集してはいないものの、戸数が非常に少ない。その上、山間の平地を走る主要道沿いに住宅が集まっている。このように、丹生や周辺地域では、住宅地域が道路沿いや特定の箇所に集中している。

特産品となっている。また、丹生では仏花として用いられるソテツや日本料理の添え物として使われるハランも栽培している。

現在の丹生の戸数は27戸で、90人が住んでいる。農家は19戸で、花卉農家が2戸、ビワ農家が17戸を占める。また、ビワ農家のうち冬期にナバナを栽培する農家が15戸ある。ナバナを栽培しないビワ農家2戸では冬季に花卉を栽培している。このほかに農家数に含まれない自給的農家も2戸ある。

富浦町で丹生と関係が深いのは深名と多田良の2地区である〔同②〕。深名は稲作とビワ栽培が盛んだったが、1980年ころから花卉栽培に移行していった〔農林水産省統計情報部 2001〕。多田良〔同③〕は漁港に構える集落ではあるが、全427戸中、39戸が農家となっている〔同上〕。ともに農家出身の女性が多いため、丹生ではビワ栽培の繁忙期に両地区から作業を手伝う

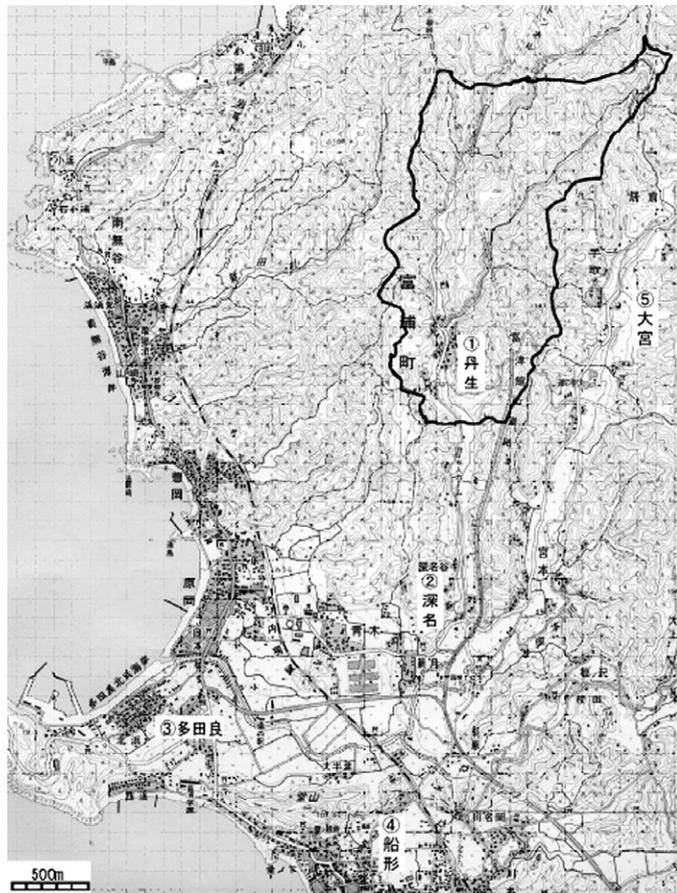


図2 丹生の周辺集落  
(国土地理院発行2万5千分の1地図(那古)をもとに作成)

## 4.2 農家形態の変化

1970年から現在までの丹生の農家形態の変化を総括すれば、大半の農家が農業を主軸に兼業農家として生計をたててきたことがわかる〔表1〕。農林水産省の統計によれば、丹生では1975年から1985年まで専業農家が過半数を占めるが、1990年になると1970年同様、再び兼業農家率が高くなる。一方で現在まで第2種兼業農家は少なく、多くの農家は農業を主軸にした生計活動をしてきた。

次に丹生の農家の兼業形態<sup>(2)</sup>についてみると、1970年に農業就業人口の15%が従事していた臨時雇いは1980年にかけて大きく減じている〔表2〕。他方で1980年以降には会社勤めなどの恒常的勤務が増えてもいる。しかし、1985年からは以前ほどではないが、臨時雇いが再びみられるようになる。

〔表1〕業態別農家数および兼業農家率（丹生）

	専業農家	第1種兼業農家	第2種兼業農家	総農家数	総戸数	兼業農家率※1	自給的農家数
1970年	4	21	3	28	28	85.7%	—
1975年	20	3	3	26	—	23.1%	—
1980年	23	1	2	26	27	11.5%	—
1985年	15	7	4	26	—	40.7%	—
1990年	10	10	4	24	27	58.3%	5
1995年	9	6	6	21	—	57.1%	3
2000年※2	9	8	1	20	31	45.0%	2

※1 総農家数に占める第1種・第2種兼業農家数の割合 [農林水産省統計情報部 2001]

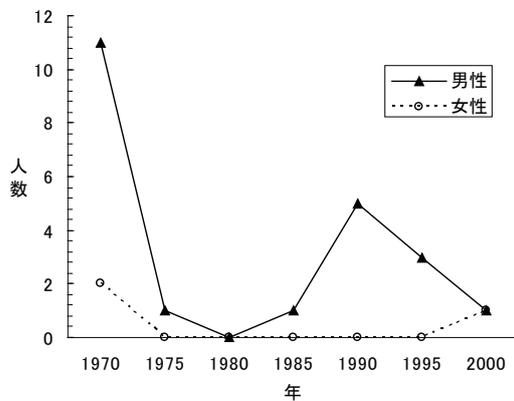
※2 2000年の専業農家・第1種兼業農家の値は販売農家のもの。同年の第2種兼業農家数については便宜上、専業農家と第1種兼業農家数を総農家数から引いたものを用いた。

〔表2〕兼業従事者数（丹生）

	臨時雇い	恒常的勤務	農家就業人口※	農業就業人口に占める臨時雇いの割合
1970年	13	7	85	15%
1975年	1	5	87	1%
1980年	0	4	84	0%
1985年	1	15	62	2%
1990年	5	16	58	9%
1995年	3	16	48	6%
2000年	2	10	44	5%

※1990年以前は16歳以上、1995年以降は15歳以上の人口

[農林水産省統計情報部 2001]



〔図3〕男女別臨時雇い従事者数(丹生)  
〔農林水産省統計情報部2001〕

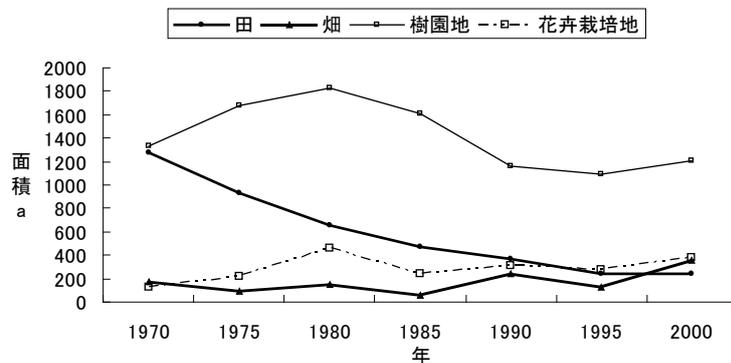
さらに、臨時雇いの従業者数を男女別にみていくと、総数は少ないものの、現在まで臨時雇いが続けられていることがわかる〔図3〕。また、丹生では1970年代後半からビワ栽培が盛んになり、収穫期に農業パートを周辺地域から雇うようになった。その一方で丹生の農家の臨時雇いは1980年代には一時下火になるが、現在も兼業としておこなわれている。つまり、丹生や周辺地域では1970年から現在まで臨時雇いという労働形態がとられてきたのである。

## ⑤……………1960年から現在までの臨時雇いと生業の変化—A家を中心に—

一生、一年、一日の3つのレベルで人々の働き方を論じるために本項では、まず、1960年から2007年までの丹生や周辺地域の人々の生業活動の変遷をあきらかにし、一生のなかで人々がおこなってきた臨時雇いについて記述する。次に丹生の農家A家を事例に上記期間における一年間の生業活動を示す。そして、現在までの一生、一年、一日のなかでの臨時雇いの役割について分析する。

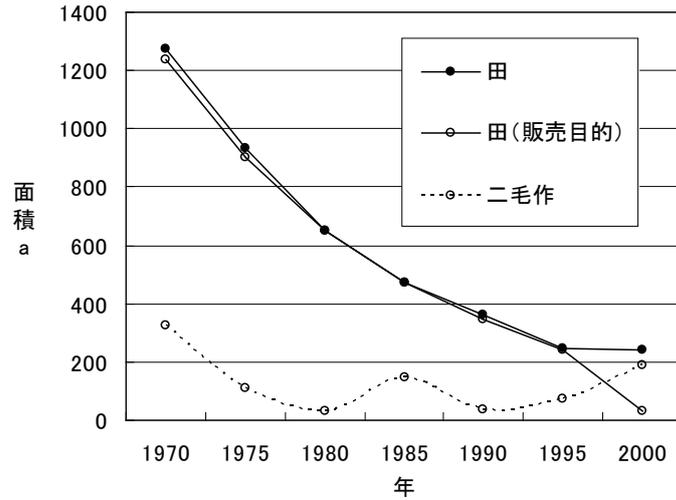
### 5.1 丹生の生業の変化

1970年以降、丹生では田地が増え、代わって畑地や樹園地が増加し、主たる生業は稲作から果樹・花卉栽培に変わっていった〔図4〕。特に販売目的での稲の作付面積は、1970年の生産調整によって米価が下落したことを受けて著しく減った〔図5〕。一方で水田面積の減少に反し、

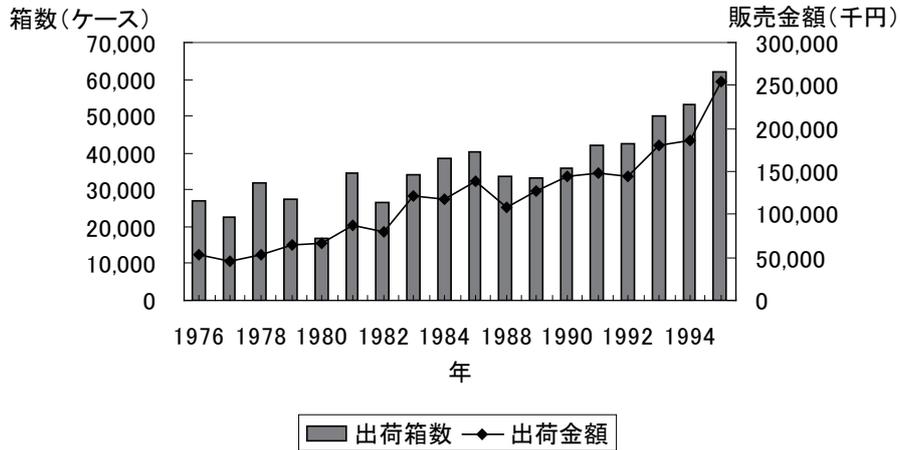


〔図4〕丹生の農地の変化  
〔農林水産省統計情報部2001〕

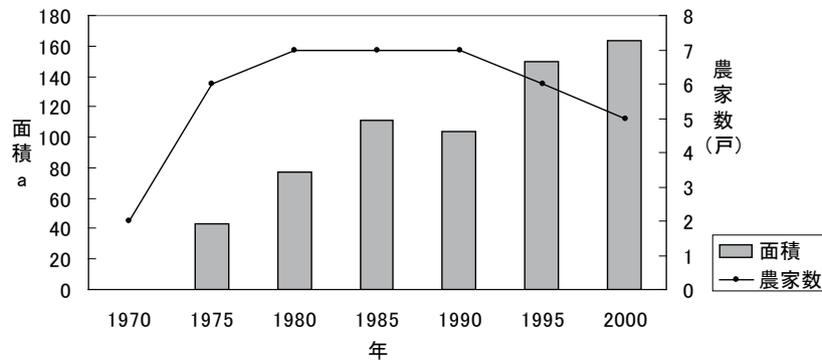
1980年ころから二毛作面積が目立ってくる。これは水田裏作のナバナ栽培が盛んになったためである<sup>(3)</sup>。そして、1976年に富浦町農業協同組合洋菜部（現安房農業組合内房地区野菜部会富浦支部）が結成されたことでナバナの生産量は一気に増加する〔図6〕。聞き取り調査では、現在、丹生でナバナを栽培している15戸のうち14戸が1976年ころからナバナの栽培をはじめたことがわかっている。さらに1970年代にはビニルハウスや温室での花卉やビワの栽培もさかんになった〔図7〕。



〔図5〕丹生の水田利用の変化  
[農林水産省統計情報 2001]



〔図6〕富浦町のナバナの年度別販売金額・出荷数量  
[洋菜部結成十周年記念誌編集委員会 1986, 安房農業協同組合内房地区野菜部会富浦支部 1996]



〔図7〕施設園芸(ビニルハウス・温室)農家数と面積  
[農林水産省統計情報部 2001]

## 5.2 A家概略

現在のA家は世帯主のA氏と妻、長女夫婦とその子女3人からなる7人家族である。世帯主のA氏は1933年に丹生に生まれ、高校を卒業後、農業や日雇い労働に就く。本論で分析期間の始点とした1960年はA氏が三芳村出身の妻と結婚した年でもある。このときA家にはA氏夫妻とA氏の父母、妹2人の6人が住んでいた。そして、1961年に長女が、1964年には次女が生まれる。また、この間にA氏の妹2人が結婚をして家を出ている。その後、次女が結婚して家を出て、現在は1981年に結婚した長女夫婦が中心になって農業を営んでいる。以下に1960年から現在までのA家における自家労働力の変遷をまとめた〔表3〕。

〔表3〕A家の労働力の変遷（1960～2007年）

年代	農業従事者	人数
1960～1963年	A氏・妻・父親・母親（繁忙期にはA氏の妹2人が手伝う）	4人
1964～1980年	A氏・妻・母親（ビワの繁忙期には長女1人が手伝う）	3人
1981～2000年	A氏・妻・母親（1998年に亡くなる） （ビワ・ナバナの繁忙期は長女・長女の夫が手伝う）	3人
2001～2007年	A氏・妻・長女・長女の夫 （ビワの繁忙期は長女の子ども3人が手伝う）	4人

## 5.3 A家の生業の変化

〔表4〕は1960年から現在までにA家が丹生で耕作してきた土地である。A家は先述の丹生の土地利用の変化と同様に1970年以降、水田の多くを樹園地や花卉栽培地に変えている〔表5〕。なかでもビワや夏ミカン、ナバナの作付面積の増加は著しい。

〔表4〕A家の耕地（1960～2007年）

地点	土地条件	A家からの移動距離	面積
1	山間傾斜地	1.7km	48.0a
2	山間傾斜地	0.8km	17.7a
3	山間傾斜地	0.08km	14.0a → 4.0a※1
4	平地	0.51km	3.0a
5	平地	0.57km	5.0a → - ※2
6	山間傾斜地	1.9km	9.8a※3
7	山間平地	0.74km	10.0a
8	平地	0km（自宅敷地内）	21.7a → 12.8a※4
9	平地	0.05km	5.8a
10	傾斜地	0.12km	4.1a
11	傾斜地	0.61km	225a → - ※2

※1 1982年の道路造成での一部買い上げ ※2 1988年の道路造成での全面積買い上げ  
※3 1995年に丹生区より借地 ※4 1979年に8.9aをナバナ作業場に変更

〔表5〕A家の土地利用の変化

地点	1966年	1974年	1982年	1990年	2006年
1	水田 ビワ 夏ミカン	ビワ 夏ミカン 花卉	ビワ 夏ミカン 花卉	ビワ 夏ミカン 花卉	ビワ 夏ミカン 花卉
2	水田 夏ミカン	水田 夏ミカン	水田 夏ミカン	ビワ 夏ミカン ナバナ	ビワ 夏ミカン 自給野菜類
3	ビワ	ビワ	ビワ	ビワ	ビワ
4	水田 花卉	水田	柿 花卉	ナバナ 花卉	ナバナ 花卉
5	水田 レンコン	水田 レンコン (-1987年)	道路用地	道路用地	道路用地
6	—	—	—	—	ビワ
7	ビワ	ビワ (-1982年)	耕作放棄	耕作放棄	耕作放棄
8	水田 野菜 柿 花卉	水田 野菜 柿 花卉	ビワ ナバナ 柿 花卉	ビワ ナバナ 柿 花卉 自給野菜類	ビワ ナバナ 柿 花卉 自給野菜類
9	花卉 炭焼き小屋	花卉	ナバナ	ナバナ	ナバナ
10	貸付	貸付	花卉	花卉	花卉
11	水田 ビワ 夏ミカン	水田 ビワ 夏ミカン (-1987年)	道路用地	道路用地	道路用地

[国土地理院撮影の空中写真(那古)〈1966・1974・1982・1990年撮影〉の分析と2006年の実地踏査による]

次に、A家の主たる生業を取りあげた生業暦から年間の生業活動の組み合わせの変化をみていく。A家の生活の中心となった生業で区分した生業暦は次の5つになる。①1960～1965年までの「稲作と炭焼き」、②1966～1969年までの「稲作と木材伐採」、③1970～1972年までの「夏ミカン・ビワ栽培と木材伐採」、④1973～1975年までの「夏ミカン・ビワ栽培と日雇い」、⑤1976～2006年までの「ビワとナバナの栽培」である。

①1960～1965年 稲作と炭焼き

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
稲作			育苗・耕起・田植				除草		収穫			
木炭生産												
野菜栽培		収穫			播種	除草	除草	収穫	播種	除草		収穫
酪農												
花卉栽培					収穫		除草	収穫				施肥
ビワ栽培			除草	摘果	除草	収穫	除草	施肥	剪定・摘房			施肥

〔図8〕1960～1965年までのA家の生業暦

この時期、A家では稲作・木炭生産・野菜栽培・酪農・花卉栽培・ビワ栽培をしていた〔図8〕。A家の生業の中心は約70aの田地での稲作と冬期の炭焼きだった。また、A氏は木炭生産の合間

に薪売りや大宮区〔図2⑤〕の製材所での木材伐採の臨時雇いもした。しかし、A家の現金収入源となっていた炭焼きも1965年に終わる。1960年ころから富浦町でプロパンガスが普及し、炭が売れなくなったためである。さらに、A家では1964年にA氏の父親が病気になるのを機に現金収入源となっていた乳牛の飼育もやめた。

② 1966～1969年 稲作と木材伐採

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
稲作			育苗・耕起・田植				除草		収穫			
木材伐採												
野菜栽培		収穫			播種 除草	除草	収穫	播種	除草		収穫	
花卉栽培				収穫		除草	収穫					施肥
ビワ栽培			除草 摘果	除草	収穫	除草	施肥	剪定・摘房				施肥

〔図9〕1966～1969年のA家の生業暦

この時期、A家は①の時期と同様に稲作中心の生計活動をおこなっていた〔図9〕。炭焼きをやめたA家ではA氏の冬期の仕事が木材伐採の臨時雇いになった。

③ 1970～1972年 夏ミカン・ビワ栽培と木材伐採

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
稲作			育苗・耕起・田植				除草		収穫			
木材伐採												
夏ミカン栽培	収穫			除草	収穫					除草	剪定・施肥	
花卉栽培		収穫			収穫		除草	収穫				施肥
ビワ栽培			除草 摘果	除草	収穫	除草	施肥	剪定・摘房				施肥

〔図10〕1970～1972年のA家の生業暦

1970年の生産調整によって米価が急落したこの時期、A家は夏ミカンとビワの栽培に力を入れるようになる〔図10〕。A家では野菜栽培もやめ、果樹栽培が生計活動の中心となる。花卉栽培と木材伐採の臨時雇いは引き続きおこなっていた。

④ 1973～1975年 夏ミカン・ビワ栽培と日雇い

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
稲作			育苗・耕起・田植				除草		収穫			
日雇い												
夏ミカン栽培	収穫			除草	収穫					除草	剪定・施肥	
花卉栽培		収穫			収穫		除草	収穫				施肥
ビワ栽培			除草 摘果	除草	収穫	除草	施肥	剪定・摘房				施肥

〔図11〕1973～1975年のA家の生業暦

この時期、1971年からの夏ミカンの全国的な値下がりや、丹生の多くの農家が夏ミカン栽培をやめていった。A家でも1971年から夏ミカンの出荷量を減らしていき、1982年ころに出荷をやめた。そして、A氏は1973年から新日鐵君津工場の日雇い労働をはじめた〔図11〕。勤務期間は

ビワの収穫が終わり、比較的仕事の少ない7月から9月だった。A氏はその後、君津で3年間、日雇い労働に就いたが、1975年に常勤への変更を迫られた際に、自家の農業を優先して辞職した。  
⑤ 1976年～2006年 ビワとナバナの栽培

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
稲作				耕起・田植			除草		収穫			
ナバナ栽培		収穫							播種・防除			収穫
花卉栽培	収穫				収穫		除草	収穫		除草	剪定・施肥	
ビワ栽培			除草	摘果	除草	収穫	除草	施肥	剪定	摘房		施肥

〔図12〕 1976～2006年の生業暦

この時期からA家ではビワとナバナの栽培を中心とした生計活動をする〔図12〕。稲作については自給用と販売用に23.5aを耕作するだけになった。また、ビワの摘果作業が稲の育苗期間と重なるため、稲の苗を購入して摘果作業に労力を集中させるようになった。一方で、A家では1982年から主たる収入源であるビワの樹園地が減少する〔表5〕。1982年には広域農道敷設のためビワの樹園地10aが買い上げられる。さらに1983年には前年の台風によって被害を受けたビワの樹園地を放棄する。その結果、1983年にはA家のビワの生産量が大きく減った。そこで、A家は1985年にビワの直接販売をはじめ、収益性の高い経営を目指すようになる。最初は全くふるわなかった直接販売も次第に固定客がつき、A家では徐々に販売方法を市場出荷から直接販売に変えていく。しかし、1988年には丹生を通る富津・館山道の造成のため、再びA家の土地が買い上げられる。買い上げられた土地は半分近くがビワの樹園地であった。この道路の造成で樹園地が買い上げ対象となった丹生のビワ農家のなかには農業自体をやめるものもあった。A家でもビワの樹園地が減ったことは痛手であったが、直接販売の売り上げも伸びており、経営上は樹園地の減少が問題にならなかった。また、A家では1976年にナバナの栽培をはじめた。さらに、2001年からはA氏の長女の夫が農業に就いて労働力が増えたため、ナバナの栽培面積を増やしている<sup>(5)</sup>。

## ⑥……………丹生における臨時雇いの変化

丹生の人々は1960年から現在まで労働者として、あるいは雇い主として臨時雇いと関わってきた。人々は木材伐採などの日雇い労働をはじめ、様々な臨時雇いに就いてきた。また、丹生の人々はビワやナバナのパートとして周辺地域の人を雇い入れてもきた。これは丹生や周辺地域で臨時雇いが職種を変えつつも絶えずおこなわれてきたということでもある。ここでは、年代ごとに丹生に關係する臨時雇いの雇用形態を詳しくみていく。

### 6.1 1960年代から1970年代前半の臨時雇い

#### (1) 木材伐採・土建業の日雇い労働(青・壮年男性)

丹生ではプロパンガスの普及により、1960年代中盤に炭焼きがおこなわれなくなる。代わって冬期の仕事になったのが炭焼きの合間に行っていた木材伐採である。A氏同様、30代を中心に青年・壮年男性の多くは1960年代後半に大宮区にあった製材所で木材伐採の職に就いた。大宮区の製材

所ではこのころ、冬場のみ木材伐採から製材までをする臨時雇いを雇用していた。また、木材伐採の臨時雇いをしなかった家では土木や建設関係の会社に冬期間の仕事を求めた。

## (2) ビワのパート(青年男性)

1960年代から1970年代前半には規模の小さいビワ農家の10~20代の男性が近隣の家でビワのパートに就くこともあった。収穫したビワを山から背負って作業場まで運んでくる仕事で運搬量に応じた出来高制であった。とはいえ、この時期のビワ栽培は大規模ではなかったのでパートに雇われる人は少なかった。

## 6.2 1970年代後半の臨時雇い

### (1) 土木・建設業及び工場での日雇い労働(青・壮年男性)

富浦町では1970年頃から松喰い虫による松の枯死が目立つようになる。折からの木材単価の下落も重なり、1975年には丹生の男性たちが働いていた大宮区の製材所が廃業する〔富浦町史編さん委員会 1988, 638〕。そこで、1970年代には仕事の減った木材伐採に代わって土木・建設業や工場などでの日雇い労働が丹生の農家の兼業となる。

A氏が勤めていた新日鐵君津工場は1965年に操業し、1971年に高炉を増設した〔君津市史編さん委員会 1993, 501〕。高炉増設にともない、多くの労働者が必要になった工場では、遠方まで求人活動をし、君津市から車で1時間ほどの館山市まで送迎バスを運行した。工場では3交代制の7時間、週6日の勤務日程が組まれ、月給は12~13万円ほどであった。しかし、丹生では1970年代後半からのビワ生産の拡大によって農業収入が増え、日雇い労働で家計を補う必要はなくなっていた。そのため、丹生で君津工場の日雇い労働に就いたのはA氏だけだった。

無論、この時期にはA家も賃金労働に就かなくてもよいほどの収入をビワ栽培で得ていた。それでも、A氏が日雇い労働に就いたのは農家を継ぐことをためらっていたためである。また、A氏には君津市のような都会に出てみたいという気持ちもあった。A氏はその後、君津で3年間、日雇い労働に就いたが、1975年に常勤への変更を迫られたのを機に辞職し、農家を継いだ。

## 6.3 1970年代後半から1995年までの臨時雇い

### (1) ビワのパート(青・壮年期の男・女)

丹生では1970年代後半にビワの生産量が著しく増え、摘果や収穫、出荷の作業に人手が不足するようになった。そこで丹生の人々はパートを雇い入れはじめた。摘果・収穫作業には主に男性が、運搬・出荷作業には女性が雇われた。パートの仕事には昼食が付き、遠方から来る場合には雇い主が送迎をしていた。

摘果作業は樹上に実る果実を減らして、形のいい大きなビワを育てるためにおこなわれる。3月初旬から4月中旬にかけて木に登って果実を一枝に数個残して摘みとり、残した果実のひとつひとつに袋をかける。収穫作業は6月初旬から下旬までの約3週間におこなわれる。実がやわらかいビワを傷つけないように枝からもぎ取る収穫作業は丁寧さが求められる仕事でもある。そして、両作業とも、樹上で作業をするために危険をとまなう。さらに、収穫作業の場合は大量のビワを運搬するので体力も必要になる。<sup>(6)</sup>両作業とも労働時間は8時から17時ころまでの休憩をはさんだ約7時間で、日給は男性が7,000円、女性が6,000円であった。

出荷作業は収穫されたビワの袋をはずして出荷用の箱につめ、その箱を梱包して荷造りをする作

業である。主に女性の仕事とされているが、雨などで収穫作業がない場合には男性も手伝う。労働時間は9時から17時までの休憩をはさんだ約7時間で、日給は3,000円だった。また、1970年代後半から1990年ころまでは、収穫時期にパートと家族の食事の支度などの家事をする女性を住み込みで雇うこともあった。

1960年代にパートとして丹生のビワ農家に雇われたのは、丹生の20～30代の男女や農家の親戚などだった。経営規模がそれほど大きくなく、雇用人数も1戸で2～3人ほどだったので丹生の青年や親戚だけで労働力が足りていたのである。しかし、1970年代後半になるとビワの生産規模が飛躍的に大きくなり、労働力が足りなくなってくる。そこでパートとして雇われたのが三芳村や深名などの周辺地域で酪農や稲作をしていた男女だった。酪農業は夏場の日中は比較的手が空いていた。春や秋は家畜の飼料となる草を刈る作業で忙しくなるが、夏場は搾乳や畜舎の管理など、早朝や夕刻に集中して済ませることができた作業がほとんどだった。また、稲作をしている人たちは5月には田植えが終わっており、6月のビワの収穫期はとりたてて作業に追われることのない時期であった。さらに、比較的規模が小さいビワ農家や収穫が丹生よりも早い南無谷のビワ農家も自家の収穫作業の前後に丹生でパートとして働くことができた。このように丹生のビワの収穫期と周辺地域の畜産業や稲作、ビワ栽培の繁忙期が異なっていたため、丹生では周辺地域から容易にパートを集めることができた。1970年代後半の丹生では1戸で20～30人ものパートを雇用していたビワ農家もあり、パートの人手に困ることは少なかったのである。そして、この時期にA家もビワ生産の拡大にともない、収穫作業や出荷作業に多くの人を雇うことになった。

まず、A家では1965年にA氏の甥夫婦（K・L氏）を収穫作業のパートに雇う〔表6〕。さらに、1975年にはA氏の妻の実家がある三芳村で酪農業をしていたO・P・Q氏を雇用する。そして、ビワ生産の拡大とともに、より多くのパートが必要となったA家では1975年に12人を雇い入れる。このうち、船形のG・H・I氏はA氏の妻の同級生であるF氏の知人だった。J・K・L氏はA氏の親戚で三芳村から来ていた。また、A家でこれだけの人数のパートが確保できたのは、ビワのパートが他の仕事と比べて賃金が高かったためでもある。A家のパートの船形の女性たちがボールペンの内職をしていたときの日給が600円ほどであったというから、送迎と食事がついて日給3,000円というビワのパートの仕事は魅力的なものであった。

〔表6〕1965～1988年のビワのパート

	F・G・H・I	J	K・L	M・N	O・P・Q
性別	女性	女性	男女（夫婦）	男性	男性
年齢※	20-30代	20代	20代	30-40代	20代
期間	1975-1988	1975-1985	1965-2006	1975-1988	1971-1988
パート以外の仕事	なし	農業	農業	農業	酪農業
経験	なし	なし	なし	なし	なし
住所	館山市船形	三芳村	三芳村	深名	三芳村
関係	妻の同級生とその知人	親戚（姪）	親戚（甥夫婦）	知人	知人

※年齢は雇用開始時のもの

こうして丹生のビワ農家は親戚や知人を介して多くのパートを雇い入れてきたが、1980年代後半になるとパートの確保が難しくなった。1980年代後半から酪農業や稲作が低迷し、パートの担い手となってきた酪農業や稲作で生計を立ててきた人たちが減っていったためである。1980年代後半には畜産品の価格下落などにより、三芳村で酪農業が衰退していく。また、富浦町でも1970年以降、生産調整の影響で稲の作付面積が減っていく。その結果、酪農や稲作をしていた周辺地域の人々の多くは畜産業や農業をやめて会社や工場に通年で勤めるようになった。A家でも、酪農をしていたO・P・Q氏と稲作をしていたM・N氏がそれぞれ酪農や稲作をやめて会社員になり、結果としてパートをやめることになった。さらに、F・G・H・I氏がF氏の夫が病気になったのを機にパートをやめ、J氏も夫の仕事を手伝うためにパートをやめた。

パートの確保が難しくなるなか、ビワ農家は会社員などに新たなパートの担い手を求めた。そして、1980年代後半からは会社員のM氏を会社の休日だけ雇用する。また、長女の知人の主婦をパートに迎えた〔表7〕。パートの賃金も1990年ころからの他産業での賃金上昇にともない、丹生のビワ農家全体で値上がりした。収穫作業は男性が日給10,000円、女性も8,000円になった。出荷作業でも日給は5,600円になった。

〔表7〕1989～1994年のビワのパート

	K・L	M	N
性別	男女（夫婦）	男	女
年齢※	40代	30代	50代
期間	1965-2006	1989-1994	1989-1994
パート以外の仕事	農業	会社勤務	なし
経験	あり	あり	なし
住所	三芳村	丹生	館山市
関係	親戚（甥夫婦）	知人	長女の知人

※年齢は1989年当時

## 6.4 1995年以降の臨時雇い

### (1) ビワのパート

現在、丹生のビワのパートは5戸で雇われている28人である〔表8〕。1995年以降も、各戸ともにパートの日給はほとんど変わらず、1989年以降と同様の賃金体系になっている。A家では直接販売の拡大とともに宅配便の荷数が増え、1995年からO氏を雇い入れて宅配便の事務全般を預けた〔表9〕。また、1995年からA家では周辺地域で花卉栽培をしている女性たち（Q・R・S氏）をパートとして雇用しはじめた〔表9〕。富浦町ではビワの収穫期が花卉栽培で球根を植え替えた直後に当たる。球根の植え替え直後は特に作業がないため、花卉栽培をする人たちがパートの担い手になることができたのである。さらに、A家では夏期にはそれほど仕事がなかった自営業者（O氏）をパートとして雇っていた。このようにA家では花卉栽培をする女性たちや自営業者など、ビワの収穫期に少しでも時間のある人たちをパートとして雇用してビワ栽培を続けていったのである。

〔表 8〕ビワのパート雇用人数（2005年）

	男性	女性	合計
A家	1	4	5
B家	4	3	7
C家	2	3	5
D家	3	3	6
E家	2	3	5

〔表 9〕1995年以降のビワのパート（親戚以外）

	M	O	P	Q	R	S
性別	男性	男性	男性	女性	女性	女性
年齢※	40代	50代	60代	30代	30代	30代
期間	2000-2006年	1995-2000年	1995-2000年	1995-2006年	2003-2005年	2003-2005年
パート以外の仕事	会社勤務	布団問屋	なし	花卉栽培	花卉栽培	花卉栽培
経験	あり	あり（事務）	なし	あり	あり	あり
住所	丹生	館山市布良	館山市船形	多田良	深名	深名
関係	知人	長女の知人	長女の知人	長女の同級生	長女の友人	U氏の紹介
パートの兼務等	なし	なし	なし	夫がC家でビワパートをしている	深名のビワパートを兼務	深名のビワパートを兼務

※年齢は雇用開始時のもの

## (2) ナバナのパート

ビワ栽培が拡大する一方で、丹生では1976年から本格化したナバナ栽培でも規模を拡大していった。これにともないA家、B家ではナバナのパートを雇いはじめる。A家では2001年に長女の夫が農業に就いたことでナバナ生産を拡大し、パートを雇用するようになった。B家では1995年ころからナバナの栽培規模を拡大し、パートの雇用をはじめた。

ナバナのパートは時給800円ほどだが、かなりの労力を費やす仕事である。パートはナバナを畑から摘み取る収穫作業と、収穫したナバナを選品して巻紙を巻き、長さを整える出荷作業をする。A家では収穫作業と出荷作業に、B家では収穫作業のみにパートを雇い入れている。収穫作業は午前9時から12時にかけておこなわれる。その後、昼食をはさみ出荷作業へと続くが、パートは遅くとも15時には作業を終える。収穫作業は11月下旬から3月末までの比較的冷え込む時期におこなわれる。腰を折ってナバナを摘み取る作業は楽ではない。出荷作業も座り仕事ではあるが、ナバナの葉を整えるなどの細かな作業があるため、疲労感は相当なものである。

A家やB家ではナバナのパートに主婦（U・V氏）や自営業者（P氏）、公的機関の臨時職員（T氏）を雇ってきた〔表10〕。ナバナのパートはビワのパートとは異なり、4ヶ月以上に渡るため主

婦や自営業者など長期間働くことができる人に限られている。そしてナバナとビワのパートを続けると約半年間、職が得られるため、ナバナとビワのパートを兼務する人が多くなっている。だが、金銭面でみればナバナのパートだけで十分な収入を得ることはできないのでパートたちは年金や配偶者の収入を主たる生計手段としている。

〔表10〕 A・B家のナバナのパート

雇い主	A家		B家	
	P	T	U	V
性別	男性	女性	女性	女性
年齢	60代	20代	40代	40代
期間	2003-2004年	2001-2002年	1995-2006年	1995-2006年
パート以外の仕事	A家のビワパート	公的機関の臨時職員 C家・D家のビワパート	B家のビワパート	B家のビワパート
経験	なし	あり	なし	なし

※年齢は雇用開始時のもの

### (3) 農業以外の臨時雇い

丹生の人々が従事している臨時雇いには農業以外のものもある。A家では長女が1991年から1994年まで飲料の配達パートをしていた。その後、1995年から2年間は富浦町の道の駅で臨時雇いの観光バスの添乗員をしていた。さらに、長女は富浦町の受講料補助制度を利用し、1997年からホームヘルパーの講習を受けて2000年に資格を取得した。そして、現在まで長女は資格を生かして農閑期にホームヘルパーや家政婦の仕事をしている。同様に丹生で農業をしているW家でも農閑期に農業従事者の30代の長男が運送業のパートをしている。このような農閑期の臨時雇いはA家の長女によると「うちにいるだけだと嫌だから、じっとしてられないから、いろいろやっている」というものだという。このように1970年代後半から一時おこなわれなくなった丹生の人々の農業以外の臨時雇いは1990年以後になると職種を変えて再びおこなわれるようになった。しかし、ビワやナバナの栽培が拡大して農業収入が増えた現在では農業以外の臨時雇いの収入は農業収入に対して微々たるものである。

## ⑦……………臨時雇いの意味の変化

### 7.1 臨時雇いの経済的意味の希薄化

1960年から1970年代前半にかけて、丹生では青・壮年の男性が木材伐採や土木・建設業などの臨時雇いをしてきた。そして、この時期の臨時雇いは現金収入源として生計活動のなかで重要な意味をもっていた。しかし、1970年代後半になると林業が衰退し、青・壮年の男性たちは農閑期に工場や土木・建設業の臨時雇いに就くようになる。それでも1970年代になるとビワ栽培で十分な収入が得られるようになり、臨時雇いで家計を補う必要がなくなっていく。その結果、1970年代

後半からは臨時雇いをする農家が少なくなっていく。一方でピワ生産の拡大によって労働力が不足しはじめたピワ農家は周辺地域の人々をパートとして雇い入れるようになる。これによって丹生の人々は臨時雇いの被雇用者から雇用主へと変わっていった。

A家でもパートを臨時雇いで雇うことで労力を確保し、現在までピワ農家として経営を続けることができた<sup>(8)</sup>[表11]。これは1965年から現在まで臨時雇いの担い手となる人材が周辺地域に常にあったということでもある。つまり、臨時雇いの労働形態が丹生と周辺地域にとって相互に求められる働き方であったのである。

このように丹生や周辺地域では、職種や就労形態を変えつつ臨時雇いが続けられてきた。しかし、ピワ生産の拡大により、農業収入が増えていた農家にとって臨時雇いの経済的意味は1970年代後半には希薄化していた。1970年代後半以降のピワやナバナのパート、農業以外の臨時雇いにしても、生計を支えるほどの収入を得られるものではない。つまり、現在では臨時雇いの生計活動としての意味は希薄化してしまっているのである。では、丹生や周辺地域の人々にとって臨時雇いは日々の生活のなかでどのような意味をもって続けられているのだろうか。

【表11】A家でのピワのパート雇用人数および家族労働者数

期間		1965-1974年 (導入期)	1975-1988年 (最盛期)	1989-1994年	1995-2005年
				(直接販売が主流に)	
家族		4	4	5	7-8※
パート	親戚	2	2-3	2	2
	親戚以外	0	9	3-4	6

※1998年にA氏の母親が亡くなり7人に

## 7.2 日々の生活のなかの臨時雇い

丹生や周辺地域で臨時雇いが続けられる理由のひとつは臨時雇いが外出の手段になることである。丹生や周辺地域で臨時雇いをする人々はしばしば外出のしにくさを訴える。実際に丹生のA家の人々の行動を調べてみても私用での外出時間は非常に少なかった。A氏の妻の場合、農閑期の外出は30日間で39時間だけだった。A氏の長女もこの期間に出かけたのは27.5時間にすぎない<sup>(9)</sup>。これは一般の主婦の外出時間と比べるとかなり少ない<sup>(10)</sup>。また、男性の場合は私用での外出時間がさらに少ない。A氏の場合、同期間の外出時間は15.5時間、長女の夫の場合は7.5時間である<sup>(11)</sup>。では、どうして丹生や周辺地域の人々は外出をしにくいのだろうか。

その理由のひとつは丹生や周辺地域では近隣の人に、いつ、誰が家から出かけたかが自然と分かってしまうことである。農業パートたちが住む地域は住宅が密集していたり、集落からの交通が一本の道路に限られていたりする〔図2〕。丹生も戸数が少なく、集落からの交通は一本の道路に限られている。そのため、パートの住んでいる地域や丹生では人に知られずに外出することが難しいのである。

外出をしにくい理由のもうひとつは近隣の人が頻繁に外出している人を「遊んでいる」とか農作業もしないで「ヒマだ」などと言いはやすことである。とくに女性の場合、こうした言葉をかけら

れるのが非常に耐え難いようで「遊んでいる」と言われたくないために外出を控えることもある。

ところが、こうした外出のしづらさもパートの仕事に行く場合には全く感じることはない。A家の長女の場合、上記の30日間で17.3時間、臨時雇いに就いて外出をしている。<sup>(12)</sup>A家のビワのパートの場合は2006年のパートでの労働時間が30日間で182時間であった。この臨時雇いでの労働時間の多さは外出時間の少なさと対照的である。そして、臨時雇いの労働時間の多さは私用での外出は、はばかれるものの、仕事という理由があれば堂々と外に出て行くことができるということを示している。つまり、臨時雇いは丹生や周辺地域の人々にとって格好の外出の名目や手段となっていたのである。

## ⑧……………逸脱としての生業活動

これまで見てきたように丹生やその周辺地域の人々は1960年代から現在まで様々な臨時雇いをしてきた。一方で農業の大規模化や産業構造の変化によって丹生や周辺地域における臨時雇いの経済的意味は希薄化している。ビワやナバナの農業パートやA氏の日雇い労働、若い世代の農家の臨時雇いも逼迫した経済的理由があっっておこなわれているわけではない。

本論では一生、一年、一日の3つのレベルで人々の働き方を分析してきた。まず、一生の中でみると、人々は農業に限らず、臨時雇いなどの多様な職業を経験している。丹生では一生の中で一時的に自分の家の農業から離れ、再び自分の家の農業に戻ってくるという生き方が多く見られた。A氏の場合も、農家を継ぐことへの迷いから日雇い労働に就き、3年後には日雇いをやめて農業を中心とする生活に戻っている。A氏の長女や丹生の多くの農家も一生のなかで数年間の臨時雇いを経験している。このように農業をしながら臨時雇いを兼業するという働き方はこの地域では決して珍しいものではなかった。

次に、一年の中でみると、臨時雇いは農閑期などの被雇用者が時間を自由に使える時期におこなわれてきた。とくに農業パートでは被雇用者に兼業をもつ人が多く、兼業の繁忙期とビワやナバナのパートの時期が重ならないことが重要になっていた。そして、丹生や周辺地域の人々は少しでも時間があれば、まるで時間を埋めるようにして一年間、絶え間なく様々な仕事をしてきた。

一日の中でも、ひとつの仕事をしているように見えて、その間に他の活動をしているということがよくある。<sup>(13)</sup>A氏は農作物の出荷作業に飽きて、しばしば庭木の手入れをしたり、仕掛け漁に興じたりすることがよくある。A氏の長女も農閑期であれば、日々の農作業の合間に数時間ずつ臨時雇いに就いている。一日の活動をみれば、農家といえども一日中、農業をしているだけではなく、その合間にいくつもの種類の違う活動をしているのである。

チクセントミハイは労働とは本来的に一つの仕事に打ち込んでフローという高揚感を得られるものであるとする[Csikszentmihalyi 1975, 206]。だが、産業化した農業のなかで人々は一心不乱に農業に打ち込んでいるのかというと、そうではない。近代化した農業のなかでも人々は農作業の合間に臨時雇いに就き、趣味的な漁撈活動をおこない、再び主たる生計手段となっている農作業に戻ってくる。そうした主たる生業活動から離れては再び戻ってくるという行為が現代の農業に関わる人々の労働の総体としてとらえられるのではないだろうか。

しかし、主たる生計活動からの逸脱は決して自由におこなわれていたわけではない。一生の中で彼らが様々な職種を渡り歩く一方で、農業をやめて、仕事に就かずにいることは許されなかった。

地域社会が無職でいることを許さなかったのである。つまり、生活全体の中で考えると、臨時雇いは無職でいることが許されない地域社会との折り合いのなかでおこなわれてきた労働であったのである。同様に一年のなかでも農閑期などの空いた時間を無為に過ごすことは許されなかった。一日の中でも時間があれば人々は何かしらの活動にせずにはいられなかった。生業と生業の間、活動と活動の間の空いた時間を無為に使うことは許されなかったのである。そこで少額であっても賃金を稼ぐか、自給食糧の確保につながるような生業活動をする必要があった。つまり、地域の労働観との折り合いのなかで臨時雇いや趣味的な漁撈活動などが営まれていたのである。

これまでの労働研究では生計活動という視点から労働を論じてきた。例えば、イリイチは労働のなかには賃金労働のような生計活動と直接結びつく労働と、それを支える家事のような労働があることを示している。さらに、イリイチは生計活動を下支えする家事労働が諸生業の産業化が進む以前には生計活動と直接結びつく労働と同等の価値をもっていたことを指摘している [Illich 1981]。

こうした指摘は民俗学の研究でもみられる。例えば、安室は家事や趣味的な漁撈活動も生活の上では同等の価値をもつものであったことをあきらかにしている [安室 2007]。一方、イリイチと安室はともに、諸生業の産業化が進んだ現在では生計活動を下支えする労働が、生計活動に直接結びつく労働に対して劣るものとされているという。しかし、生計活動に直接結びつこうが結びつくまいが、丹生の臨時雇いや趣味的な漁撈活動は主たる生業活動からの逸脱として位置づけられる。たしかに、現在のサラリーマンなどのひとつの仕事に徹する働き方に対して、農業の合間に臨時雇いや漁撈活動などの様々な活動をする働き方をみた場合にはイレギュラーなものとしてみえる。だが、労働が必然的に逸脱を含むものだとすれば、イレギュラーな生業活動も主たる生業活動をしていくためにはなくてはならないものだとすることがわかる。<sup>(14)</sup>

本論では先行研究で見出された個々の生業活動が実際にどのようにおこなわれているのかを参与観察や生計活動の通時的な分析から示してきた。そして、一生や一年、一日のなかで主たる生業活動を逸脱しては復帰する営みが、現代の農業と他の仕事を兼業とする人々の労働の総体としてとらえられることをあきらかにした。こうした現代の農業と他の仕事を兼業する人々の労働観のなかで、休日や余暇がどのような意味をもつのかについては今後の課題としたい。

## 註

(1)——2005年現在、兼業農家数は1,520,266戸で総農家数の77%を占めている [農林水産省大臣官房統計部 2006]。

(2)——農林水産省の統計での兼業形態には出稼ぎや自営兼業の項目もあるが、丹生では1970年以降に出稼ぎをしたものはないので省略した。また、自営兼業もほとんどないので省略した。

(3)——その後、畑地でもナバナ栽培をするようになり、畑地が増えた [図4]。

(4)——A家のビワの樹園地は日照時間が短く、丹生でも出荷が遅くなる場所にあった。市場出荷の場合、出荷が遅くなるほど値崩れをおこす。そのため、A家ではかねてから市場出荷から個人で価格の決められる直接

販売に切り替えることを考えていた。

(5)——2006年11月から2007年3月を例にとれば、A家では借地を含めた136.5aでナバナを栽培し、1,275箱を出荷している。これは丹生で2番目の出荷量である。

(6)——ビワの収穫カゴは満載時に3.6kgほどになる。通常、カゴを2個ずつ運ぶので1回の運搬量は7kgを超える。その上、ビワ栽培地は傾斜地が多く、足場が悪い。加えて、高所での作業もあるため、雇い主は収穫作業のパートに労働災害保険をかけている。

(7)——現在では収穫作業のパートは雇用が難しくなっており、家によっては日給16,000円を支払うところもある。

(8)——これは丹生でビワ農家を続けている13戸にも共

通のことである。

(9)——2007年4月を例にした。A氏の妻の外出の内訳は同窓会(9:00~翌16:00)、老人会(11:00~15:00)、温泉入浴(10:00~14:00)である。また、長女の場合は毎週1時間のママさんバレーの練習と4回とその移動時間が30分ずつあった。さらに、バレーの大会(9:00~18:30)、友人と会うための4回の外出(計12時間)があった。

(10)——私用での外出時間については全国規模の統計がない。そこで、名古屋市の無職主婦を比較対象にした。名古屋市では無職主婦の30日間の私用での外出時間は少なくとも25.5時間で多い場合には223.5時間になる〔神谷 1987〕。また、2005年の国民生活時間調査によると、無職主婦の私用・公用での外出時間は30日間で43.2時間である〔NHK放送文化研究所 2006, 42〕。さらに同調査によれば、自由行動に費やす時間も1995年から増加傾向にある。よって主婦の外出時間は1985年の事例よ

りも増えていることが推測される〔同上, 45〕。

(11)——A氏の外出時間の内訳は友人と会うための2回の外出(計5時間)、個人的な買い物(計2.5時間)、老人会(11:00~15:00)、温泉入浴(10:00~14:00)である。夫の場合は個人的な買い物(計3時間)、友人・親戚と会うための2回の外出(計4.5時間)となっている。

(12)——A氏の長女の場合、2007年4月のホームヘルパー・家政婦としての労働時間は17.3時間である。ピワヤナバナのパートについては各項参照のこと。また、パートに就かない男性の場合は、農作業の合間にする趣味的な活動に割かれる時間が多くなっている。たとえば、A氏の場合、農繁期の1ヶ月間では19.8時間を仕掛け漁やペットと庭木の世話に費やしている。

(13)——註12参照。

(14)——現代の出稼ぎについても問題を抱える家庭から一時的に脱出する手段となっているという指摘がされている〔作道 1991, 127-130〕。

#### 参考文献

- 安房農業協同組合内房地区野菜部会富浦支部 1996「販売金額の推移他」『20年のあゆみ』  
安房農業協同組合内房地区野菜部会富浦支部
- Ilich, Ivan 1981 *Shadow Work, Shadow Work*, Marion Boyars
- NHK放送文化研究所 2006『2005年 国民生活時間調査報告書』NHK放送文化研究所
- 神谷浩夫 1987「名古屋市における主婦の日常行動-時間利用と外出行動との関連を中心に-」  
『人文地理』第39巻第6号
- 君津市史編さん委員会 1993「臨海工業開発」『君津市史』資料編V 現代I 千葉県君津市
- 作道信介 1991「近代化エージェントとしての出稼ぎ-弘前児童相談所資料を手がかりにして-」  
『文経論叢』第26号 弘前大学人文学部
- 隅谷三喜男 1950「労働力における封建的なもの-半農半工について」『社会学評論』第1巻第1号
- 龍井葉二 2003「雇用の階層構造と労働組合-パートタイム労働を中心に-」  
『日本労働社会学会年報』第14号
- Csikszentmihalyi, Mihaly 1975 *Politics of Enjoyment, Beyond Boredom and Anxiety Experiencing Flow in Work and Play*, Jossey-Bass Publishers
- 富浦町史編さん委員会 1988「産業」『富浦町史』富浦町教育委員会
- 中村羊一郎 1997「季節労働の民俗」野本寛一・香月洋一郎編『生業の民俗』雄山閣出版
- 農林水産省統計情報部 2001「農業集落カード(千葉県富浦町丹生)」『世界農林センサス』農林水産省
- 農林水産省大臣官房統計部 2006「農林業経営体調査結果概要(確定値)」  
『2005年農林業センサス』農林水産省
- 松田睦彦 2007「瀬戸内海島嶼部の生業におけるタビの位置 愛媛県越智諸島の事例から」  
『国立歴史民俗博物館研究報告』第136集
- 安室知 1998「山間の棚田稲作地における生業複合」  
『水田をめぐる民俗学的研究-日本稲作の展開と構造-』慶友社
- 安室知 2007『複合生業論』(平成15年度~18年度科学研究費補助金研究成果報告書)  
国立歴史民俗博物館

---

矢野晋吾 2004『村落社会と「出稼ぎ」労働の社会学

－諏訪地域の生業セットとしての酒造労働と村落・家・個人－』御茶の水書房

洋菜部結成十周年記念誌編集委員会編 1986「販売金額の推移」「出荷箱数の推移」『10年のあゆみ』

富浦町農協洋菜部

渡辺栄・羽田新編 1987『出稼ぎの総合的研究』東京大学出版会

(総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻大学院生)

(2007年11月30日受理, 2008年7月29日審査終了)

## **The Meaning of Work in Rural Areas : Modern View of Work in Part-Time Employment**

WATANABE Ayumi

In this article, I shall discuss the view of work of farmers who have side jobs, through analyzing their daily activities. Part-time jobs refer to daily jobs or jobs lasting for no longer than a year, such as guest work or day labor.

Nyu, the subject of my investigation, located in Tomiura town in Minami Boso city, Chiba prefecture, is a village at the southern tip of the Boso peninsula. I set the subject period from 1960 until today. During this period, many people in Nyu engaged in part-time jobs such as day labor or part-time farm work. Part-time jobs served as a source of income during the agricultural off-season until the early 1970s. However, since the late '70s, part-time jobs became less economically significant due to the increase in agricultural income made possible by the introduction of biwa (Japanese medlar) cultivation. The reason why part-time jobs have not yet died out in Nyu or in its surrounding areas lies in the non-economical meaning of part-time employment.

First of all, part-time jobs served to kill time for people. Also, part-time jobs gave good reason for them to go outside of their homes, in an environment where going out was not easy. Furthermore, part-time jobs were a part of the various activities carried out throughout their whole life, each year, or each day.

It has been indicated through past labor studies that labor not directly connected with means of living possesses as much significance as labor directly connected with them. Also, it has been pointed out that such a view of work eroded as business became industrialized. However, business activities such as part-time jobs are considered to be a deviation from business activities that serve as a major source of income, regardless of whether or not they are connected with means of living. Even part-time jobs generally considered as irregular work were essential in agricultural life.

In this article, I have shown through participative observation and diachronic analysis how each business activity discovered by past studies was actually carried out. I have also clarified how the repetitious activity of deviating from one's major business and returning to it again daily, yearly, or throughout one's whole life, has been considered as work, in the holistic sense, for modern farmers with side jobs.

Key words: part-time job, work value, business, deviation, side job

---